

ヨーロッパにおける異文化適応支援ワークショップ参加報告

大嶋 真紀

本報告は 2012 年 3 月 12 日～16 日、パリで開催された「Helping Cross-Cultural Adaptation Trainers' Training」(異文化適応支援研修者向け研修)の参加記録である。EU 委員会の支援を受けた生涯教育プログラムの一つであり、主催は elan interculturel という研究団体、参加者は、イギリス、リトアニア、ドイツ、オランダ、フランス、イタリア、ギリシャ、トルコ、ルーマニア、日本から計 13 名で、5 日間、朝から晩まで充実した内容のワークショップであった。日本でも同種のワークショップが開催され、筆者も過去に 2 泊 3 日の参加経験があるが、日数、内容とも今回が上回る規模であった。以下にその詳細を記す。使用言語は英語である。

1 第一日目

① アイスブレイキング

はじめに主催者である講師 2 名 (ハンガリー) を含め、全員が立ったまま円を作る。名前を言って、自分の好みのジェスチャーをしながら挨拶する。アイスブレイキング。講師の自己紹介や挨拶などはない。(約 10 分) この日のみ 10 時開始。翌日からは 9 時半開始。(注: 本文では講師としたが、異文化適応ワークショップではしばしばファシリテーターという呼び方をする。講師 2 名の自己認識、自己呈示もファシリテーターすなわち活動推進者というのに近い。)

② グループアクティビティ

テーブルが用意され (実は用意されることがあまりない)、4 人ぐらいが 1 グループとなり、話し合いをしながら絵や地図などを描く。1 番目の課題。今までで 1 番印象的な旅は? 話しやすい話題であるため、それぞれがすぐ話し出す。旅先に応じて、絵を描いたり、互いに名前を書いて確認したりする。そこでグループのメンバー交代。つぎのグループに与えられた課題は、自分の職業的な達成感をもっとも感じられることを話し合うというもの。これは多少つまづく人もいる。因みに参加者の職業は、大学教員、語学教師、医師、弁護士、ソーシャルワーカー、アーティストなど。異文化間トレーナーという人もいた。年齢層は 30 代～60 代。ここでさらに多くの参加者の名前などを確認することになる。そしてさらにグループのメンバー交代。最後の課題は、他の惑星からそれぞれが到着したと想定して、どんな質問をするかというもの。ただし、言語の問題はないという前提。はじめまして、とか、どんな食べ物を食べてい

ますか、とか、社会構造は？とか次々と質問がされ、グループごとにテーブル中央の大きな紙に記されていく。カラーペンがたくさん用意されている。完成したグループごとの絵は壁に掲載され、各自が見歩く。これも一種のアイスブレイキングであると認識。(約 50 分) コーヒーブレイク (約 10 分)

### ③ コースアウトラインについての活動

これも通常の説明という仕方をはじめはとらない。まず広めの室内を全員が適当に歩きまわりながら行う。このコースへの期待を歩きながら考え、思いついた人がストップと声をかけ、告げる。講師はそれを、ホワイトボード代わりの白い紙に書き留めていく。その際、**content** (内容)、**competences** (能力)、**methods** (方法) の三区分は設けておく。かなりの回答例がそろってから、全員が円に座り、コースアウトラインのハンドアウトを配り、それとの関係で、各人の発言について講師がコメントをする。(約 50 分)

### ④ コースのルールについての説明

講師がこのコースのルールについて説明する。安全なスペースであること(表現の自由が確保されているという意味)、英語を使用言語とするが、全員がネイティブとは限らないので、互いの英語には忍耐を持って接すること、人を判断・評価しないこと、時間を気にかけることなどが告げられる。また **elan intercultural** で編纂したテキストの配布。さらにコースの評価について、毎日、壁に張った紙に自分のマークをつけ、午前、午後のコースについて、絵や図で、気分、評価を表現することというルールが課された。(約 30 分)

### ⑤ まとめ

さらに水曜日のフィールドトリップについて、各人の企画を確認。どこの組織を訪問し、アポをとっているかどうかの確認。1、2か月前からこの課題は課せられていたが、アポまでとっている参加者は1、2名。この頃になって、ようやく参加者の全容が把握できた。また講師についての自己紹介を求める声があがり、二人の講師がそれぞれ自らの研究領域、活動歴等を自己紹介。ここでランチタイム。(約 30 分)

\*\*\*\*\*

### ⑥ アイスブレイキング

午後のセッションは、アイデンティティ・ゲームから始まる。円を作り、誰かが「私は母親です」と言って前に出たら、同じアイデンティティを持つ人がその人同様中央に集まるというもの。様々な自己呈示があった。一種のウォーミング・アップ。(約 15 分)

### ⑦ カルチャーとは何かをテーマとする活動

これはこの日のメインピック。3人ずつグループとなり、各人が小さい紙

に、カルチャーとは何か、について一人4項目程度を書く。例えば、「マナー、慣習、人間関係など」次に、グループ内で、カルチャーの定義について議論し、意見をまとめて大きな紙に絵を描く。これはなかなか難しい作業であった。概念を絵や図にする作業。筆者が所属するグループでは、挨拶行動、これを握手で示す、音楽等の文化的産物、食物の図示、社会構造、人間関係などをそれぞれ関連するように円環で図示し、その周囲に自然環境を示す。さらにカルチャーは絶えず外部からの影響を受ける可変的なものであるということ占めす矢印を書くなどした。他のグループでは、大きな紙をところどころ破って、その裏柄に紙を張り、目に見えるカルチャーと目に見えないカルチャーを示したり、またほかのグループでは社会全体が一つの家、その中に個人の家を描き、それぞれがカルチャーであるとした。この大きな絵を完成した時点で、いくつかの著名な学者によるカルチャーの定義を各グループに一つずつ与え、各グループはその定義を読んでさらに絵を修正する。Franz Boas (1911)、Margaret Mead (1937)、Claude Levi-Strauss (1949)などの古典的な定義が引用された。その後、講師によるカルチャーの定義の説明、そして各グループの発表が続く。各グループがカルチャーをどのように捉えたかについて議論しながら、考察をすすめる。最後に講師によるカルチャーに関する講義が行われる。この部分では、参加者からの反論、質問等も多数出て、大変活発な議論が行われた。(約90分)そこでコーヒーブレイク。(約10分)

#### ⑧ アイスブレイキング

遅れてきた参加者のために、ここでまた輪になり、自己紹介ゲーム。今度はひざをたたきながら自分の名前を言い、さらに自分について特徴的な点を告げながら、一つジェスチャーをするというもの。みんながそのジェスチャーを真似る。(約10分)

#### ⑨ 移民についての小テストと講義

世界の移民の状況についての簡単な小テスト。採点は自己採点。この小テストはあとで点数を発表したせいもあり、また「移民」の定義が曖昧であったため、不評で、数人がただちにその場でテストの批判をした。そのあと、移民について講師による講義。経済的理由による移民、政治的亡命者、家族的な理由による移住、災害被災者、強制された移住、留学生、気候変動による移住者、ジプシー(旅行者と呼ぶ)など、様々な移民についての講義がされたが、本稿で「講義」という場合、ほとんどは議論を伴ったやりとりと理解してよい。まったくの「講義」というのはゼロに等しい。(約40分)

#### ⑩ まとめの活動

最後にまた円になり、ぬいぐるみのマウスを投げて、当たった人がこの日の

最高のこと、最悪のことを告げる。この時も移民についての小テストの批判をする人がいた。講義でよくなかったことなども遠慮なく告げられる。講師の役割は大変だとつくづく思う。終了予定時間は夕方5時半だが、その通りに終わった日は一度もなく、たいていが6時近くに終わった。(約15分)

## 2 第二日目

以下、活動等は箇条書きとし、詳細は略す。重要な点のみ詳述する。

### ① physical exercises

ホールを歩き、誰かと出会ったら、相手の名前を言う。握手して今度は自分がその相手になる。次々と出会っていく。しばらく継続。次にパートナーを組み、相手と同じ動作をする。継続。つぎに相手と反対の動作。継続。つぎに1、2、3をジェスチャーで示す。一つずつ増やしていく。3まですべてジェスチャーで相手の通りに行うのはかなり困難。次に片方がリードし、もう一方の人はひじとひじをつけたまま、動きに従う。リードする立場、従う立場を理解する。さらに全体の半分はアイ・コンタクトをする群、残りの半分はアイ・コンタクトをしない群として、ホールを歩きまわる。アイ・コンタクトを避ける群はあくまで避け続けて歩きまわる。こうした一連の動きを通じて、参加者は多様なコミュニケーション、特に非言語コミュニケーションの有りようを体感的に知ることになる。(約20分)

### ② visitor's drama

参加者中男女2名が訪問者となり、あらかじめ役割を講師より指定。参加者はYes/No questionのみを許される。「あなたはアメリカ人ですか」とか「あなたはパンを食べますか」など。たいていの質問に訪問者はなぜかNoと答える。しかも笑顔はほとんどない。質問者はだんだん不快になり、「あなたは私たちと友だちになりたくないのですか」とか「話したくないのですか」とたずねるが、答えはNo、たまにYesとなり、質問者はますます困惑するというもの。このあと、種明かしがされ、実はスカートをはいていて、笑顔を浮かべて聞いた人にもYesと答えるなどのルールがあったことが明かされる。ドラマの趣旨は、コミュニケーションの様態・効果についての体感的理解であった。(約20分)

### ③ 講義

上記のドラマの結果を受け、コミュニケーション論が展開される。講師による講義であるが、content, subjects, methods について、非言語コミュニケーション、言語コミュニケーション、直接的、間接的コミュニケーション、形式的、非形式的コミュニケーションなど様々な分類が示され、また T.E.Hall(1989)等の理論も紹介される。個人主義、集団主義下でのコミュニケーションの様態な

どについても、参加者からの多くの議論をまじえ、講義が展開される。(約 30 分) ここでコーヒープレイク (約 10 分)

④ Picture practice

文化的な意味合いのある絵を参加者が選び、同じ絵を選んだ人がグループを構成し、それぞれの絵に含まれている要素、絵から感じた感情、その背後にある規範、価値観などを話し合い、発表する。(約 50 分)

⑤ カルチャーショックについての講義 (約 20 分)

⑥ 解説

テキスト中のカルチャーショック、critical incidents の分析例についての解説。(Cohen-Emerique Margalit 1999) かなり難解な内容。(約 30 分) ここでランチタイム。

\*\*\*\*\*

⑦ ケーススタディ

フランスの病院に就職したウルグアイ人の心理カウンセラーが体験したカルチャーショック事例 (critical incident) の分析をめぐる議論。議論が沸騰し、しかも体験自体、分析手法、事例提示すべてにわたって参加者から批判続出。(約 40 分)

⑧ サイコドラマ

未知の惑星から到来した詩人が即興で物語を作り、それを通訳がみんなに紹介するという一種のサイコドラマ。詩人役になった人は、まったく即興で適当な音声で語り、また通訳に当たった人もその音声からまったく適当に物語を創作するという手法。二人の参加者がほとんど躊躇なく演じたことに驚く。ただし、カルチャーショックの観点からどのように意味づけるのかは不明であった。(約 10 分)

⑨ カルチャーショックのロールプレイ

グループにわかれ、各自が体験したカルチャーショックについて話し合う。状況、体験した感情、背後にある価値観等。各グループの中で一番興味深い例を一つとりあげ、グループのメンバーが共同でストーリーを演技する。筆者が参加したグループの例として、筆者自身の体験例がとりあげられ、これが多くの議論を呼んだ。

筆者があるフランスの老人の招待を受け、当初大変喜んだものの、重い荷物を背負い、遠路あちこち案内され、しかも最後疲れはてていた時に、ヒッチハイクをしようと提案され、大変ショックを受けたという事例。フランスでは若くはない人間でもヒッチハイクをするのかという点と、極度の疲労を相手に口頭では告げなかった筆者が、どうして相手はその気配に気づかないのかと思っ

たと述べた途端、たくさんの議論を招いた。ヒッチハイクについてはあまり議論にはならなかったが、後半の疲労を相手に伝えないという点について、なぜ率直に言わないのかということと、相手が気配に気づかないので困った (embarrassed) と述べたことについて、(embarrassed) の意味がわからないと繰り返し、問われた。説明を繰り返したが、参加者は理解できないようだった。講師が解説したのは、ヨーロッパでは何よりも自分について語ることが求められること、相手の気配に気づかないのは、口頭で伝えない限り当然であり、個人主義社会では自分の視点が何よりも重要であり、集団主義社会では相手の視点が重視されるという説明がされた。この説明だけでは収まらず、のちのちもコーヒープレイク等で議論は続いた。筆者は、この体験そのものよりも、この議論に多大なカルチャーショックを受けた。

他のグループは、アイスランドでディナーの招待を受けたが、コミュニケーションが大変直接的であったためにリトアニア出身の参加者がカルチャーショックを受けた事例、フランスの職場で上司への再三のメールに何の回答も得られなかった事例。この場合は下手な約束をしてそれを遂行できない場合、その人自身が面子を失うためだとの説明があった。これらのロールプレイを通じて、しばしば登場したのは「面子を失う」という表現だが、他者に対して「面子を失う」のではなく、自分に対して「面子を失う」という表現を講師も参加者もしばしば用いていた点が興味深かった。日本では普通、「面子を失う」という場合は、他者の面前で、他者との比較において、「面子を失う」という言い方をすると思うが、ヨーロッパでは、「面子を失う」というのはあくまで自分自身との問題であるという捉え方をすることに気づかされる。(約 100 分) コーヒープレイク (約 10 分)

#### ⑩ まとめのエクササイズ

円になり、ジェスチャーでその日、一日の体験を表現する。講師の解説も多少加わる。さらに指名されていた参加者 2 名がまとめと感想を言い、6 時近くに終了。(約 30 分)

### 3 第三日目

#### ① physical exercise (約 10 分)

#### ② プレゼンテーション

筆者に事前に課された「異文化適応」に関するプレゼンテーションを行った。留学生の異文化不適応事例について、到着直後のカルチャーショック、その後の滞在期間中の不平不満や不適応事例、さらには、長期間にわたる問題事例を各種紹介し、一つの深刻な対人関係不適応事例についてはケース・スタディを

紹介した。ただし、最後のケーススタディは結果的には成功事例ではあったが、日本に滞在する留学生がどのような学習、生活上の問題を抱えているかについて、抽象的な形ではあるが、一定の紹介を行い、参加者の理解を深めたと思われる。最後のケーススタディについては、当事者間の直接対峙（confrontation）があったかどうかという質問があり、実際にはなかったと回答。間接的に問題解決を図る日本の風土が自ずから明らかになった。（約 30 分）のちほどの講評で、このプレゼンテーションについての肯定的なコメントを参加者から得た。

### ③ インタビュー結果の提示と議論

参加者は出発前に、居住地の移民、外国人、留学生などにインタビューを行うことを課せられている。この活動では、参加者が得たデータを、感情に関わる問題事例、認識に関わる問題事例、行動に関わる問題事例の別に壁に張り付け、それぞれのデータについて講師が Q&A を行い、確認したのち、それらの居住者が異国で達成しなければいけない領域についての議論、さらに異文化環境で必要とされる態度などが議論され、（約 70 分）コーヒブレーク。

### ④ 講義

社会文化的な適応、心理的な適応、文化統合についての講師による講義。適応とはどのような挑戦なのか、なぜ困難なのか、適応のプロセス、技能と知識と態度という側面から捉えられる適応能力などについて、図を提示しながら、講義が行われた。講師の専門領域というだけあって、難解。（約 20 分）

### ⑤ identity practice

「I am」でスタートする文章を短時間で作成し、3人1グループ内で、それぞれの作成文を読みあげ、共通のカテゴリーをみつけ、報告、全体でまとめる。この練習は「Twenty statements test」といわれ、心理学者 Kuhn/Mcpartland (1954)によって開発されたもの。アイデンティティを議論する際、何が問題となるかが明確にされる。さらにはアイデンティティについての講義が行われ、提起されたカテゴリーを所属、能力、自律、継続性、独自性、意味づけなどの観点から分析した。最後に、これらの理論的枠組みが西洋的な価値観に基づいたものであり、非西洋諸国の人々を対象に利用できるのか、参加者から疑問が提示された。この参加者は在日経験があり、期間中常に批判的な視点で発言したのが印象深い。（約 30 分）

### ⑥ 午後のフィールドトリップについて、とまとめ

筆者の「異文化適応」に関するプレゼンについてのコメントがあった。アジア理解が深まったとするもの。この日の午後は、パリの移民、外国人、留学生受け入れ施設を各自が訪問し、事前にアポをとった人にインタビューを行い、どのような受け入れが行われているかを視察してくるというもの。筆者は

類似のプレゼンを後日要求されていたため、免除されていたが、他の参加者は施設の選択、アポの確保に当日まで苦慮している者もいた。(約10分) 1時終了。

#### 4 第四日目

##### ① 前日のフィールドトリップの結果報告

各グループごとに施設の紹介、対応者の反応、問題点などについて、報告を行った。パリにある施設という性格から、筆者の判断ではそれらの施設が直接、外国人や移民、留学生などに対応するというよりは、いろいろな施設、機関の統合的な組織であるという印象を受けた。そのせいか、いずれの施設でも、インタビュー時の対応は極めてそっけなく、時には不親切でさえあるが、講師の解説も加わり、そのような場合には粘りに粘ることで、来訪の目的を達成できるとのことであった。実際、グループによっては、粘った結果、来訪の目的を告げ、また実際にその組織がどのような活動を行っているかについての詳しい説明などを得ることに成功したケースや、当初、悪い印象だったのが、最終的には良い印象に代わったというものなど、様々であった。またこのようなインタビュータスクの場合は、明確な目的、明確な質問を携えていくことが不可欠であるとの議論もあった。病院を訪問したグループでは、実際の移民対象セラピーの現場も見学できたなどの報告もあった。どのようにしたら、外国人対象の施設でより適切にサポートできるかなどの議論が最後に行われた。(約100分) ここでコーヒーブレイク。

##### ② カルチャーショックの諸段階についての講義

Ovale のモデルに従い、理論的導入があった。ハネムーンの段階、危機の段階、移行期、適応の段階など。ニュージーランドでの日本人学生の時間軸を越えての不適応事例、長期にわたる移住者の適応に関する研究などの質疑があった。(約30分)

##### ③ 文化的統合についての講義

ここからはコーチング理論に移行していく。コーチングとは、相手の能力を引き出す、相手に寄り添うという性格を有する。新しい分野の仕事で、変化のサイクルを表す Hevin/Turnar (2006) のモデルが示される。(約40分) ここでランチタイム。

\*\*\*\*\*

##### ④ 講義

午前に続き、コーチングの理論的枠組みと関係の枠組みが示される。さらにコーチングの諸段階として、探索・聞き取り・統合・明確化などの諸段階が示



される。(約 30 分)

#### ⑤ ポートフォリオの講義及び活動

コーチングの一つの手法として、ポートフォリオの手法の紹介。ポートフォリオにより、どのようなスキル、態度、知識、肯定的又は否定的反応が得られるかなどの議論が行われる。そして、実際にペアを組み、ポートフォリオの一部を体験する。筆者のペアでは、筆者からは相手に、職業的生活の領域及び趣味の領域について、講師の **go deeper**(より深く掘り下げる) というヒントを元に、可能な限り、質問を深めていく努力を行った。相手は筆者に対し、家族・友人関係についての質問を行った。筆者の相手は、イタリアで囚人、ボートピープルなどを対象に語学教師をしている人物であったため、様々な質問を試みたが、そんなに簡単に **go deeper** とはいかなかった。また相手もまた同様であった。各ペアワークが終了後、どのように感じたかについて、各ペアからの報告があった。信頼感、関係性、喜び、共通点の発見、能動的聞き取り、暗示の禁止などについての解説が続く。しかしながら、ポートフォリオの手法については、再び、西洋的な考え方に基づくものであり、非西洋では応用可能か、それぞれの職場では応用可能か、など様々な意見が出た。筆者は、個人情報に関わるため、必ずしも適用できない場合があると述べた。(約 100 分)

#### ⑥ SWOT の紹介

次に扱われたのは **SWOT** の手法である。概論は示されたが、詳細は省かれた。ポートフォリオと同様の手法で実施できるとの説明があった。**SWOT** とは、**Strengths** (得意な点)、**Weaknesses** (弱点)、**Opportunities**(機会)、**Threats** (脅威となる点)の四点について、個人の計画や希望について分析する手法である。(約 30 分)

#### ⑦ まとめ (約 20 分)

### 5 第五日目

いよいよ最終日である。

#### ① アイスブレイキング

**warming up.** 空間を歩きながら、二人の人と同じ距離を保つように指示される。ストップがかかってもなかなか固定しない。一人が動くとみんなに影響する。このことから何を学ぶかと問われる。(約 15 分)

#### ② **Transition and Happiness** についての講義

このワークショップのハイライトである。移民が感じられる幸せをどう位置づけるかが図示される。特に、喜び・流れ・意味づけとの関連で、幸せが定義される。**Seligman** (1991) による人生の意味なども紹介される。(約 30 分)

### ③ アイスブレーキング

ここで、参加者によるアイスブレーキングが一つ紹介される。(約15分)

### ④ プレゼンテーション

筆者によるウェルカム・プログラムの紹介。出発前から要請されていた勤務校での留学生の迎え方について、到着前、到着時、到着後の各段階ごとの受け入れシステムについてのプレゼンを行った。日本では留学生を受け入れるに当たり、受け入れをサポートする人を対象とする事前のガイダンスを行っていること、なぜそれが必要か、どのように行っているかなどを紹介した。また到着時のいわゆるオリエンテーションについては、どのような概念と規模で実施しているかについて、概略を説明する。さらには、到着後、ほぼ一学期を費やして、留学生を対象に、専門領域の学習とは別に、適応のための様々な導入を「居場所発見シラバス」のもとに筆者自身が行っている異文化理解教育の概略、及びその具体例として、慣習とマナーをどのように導入しているかについて実演を交えて行った。参加者には、様々なフリップ、箸、食品のラベル、食品サンプルなどを用い、参加型の導入を行い、好評であった。参加者それぞれの職業的背景は大きく異なるが、各自の領域で、日本的な繊細なアプローチは困難だというコメントもあった。(約30分)

### ⑤ 異文化間介入プログラムの創造

これが本ワークショップの最終目標となる。ニーズの分析、目標設定、内容、コースの概略、実施、評価等について、理論的導入がまず行われた。その後、職業的に近いメンバーでグループを構成し、仮想のプログラムを作る作業が課される。昼食時間も含み、3時間で完成させるというもの。

筆者が属したグループは、大学教員、語学教師等のグループであったが、5日間の移民対象のプログラムを作るというところまでは合意形成が簡単であったが、そのあと、1日目、2日目のプログラム内容を策定するのに2時間を要した。まったく意見が一致しない。ランチタイムも過ぎ、昼食抜きかと恐れたが、その頃から根負けしたメンバーからの意見が多少減り、何とか1日目の自己紹介の手法、アイスブレーキング(導入活動)での期待の表明、そのあとの街探索ゲーム、2日目の買い物タスク、3日目のピクチャータスクによるカルチャーショック理論の導入までどうにか固まる。こうした項目は大きな白紙に次々と絵や図、文字で表示していく。あるいは雑誌の切り抜きを貼ったりして、形を作っていく。4日目は写真撮影タスク、ここでは意見はまとまらず、5日目に食物アクティビティーを計画するも、その準備はどうか、など意見はばらばらで、さらに5日目の前半にSWOTをやることについては意見が真っ二つに分かれたまま、ランチに分散。ここで筆者もついうっかり、他のグループ

のランチに合流してしまい、議論が半減した。

そして締め切りの午後2時半少し前に合流すると、筆者のグループは最終部分がまとまっていない。筆者はランチを抜けたことについてひたすら謝罪したが、メンバーも分散したようでまったく気にもとめられず、しかもグループの案がまとまっていないことにも全員無頓着。そこで最後のSWOTだけは、何とか確認をとり、表に書き込み、白紙がほぼ埋まる。締め切り時間ぎりぎりまで完成した。

その後、各グループが作成したプランについてプレゼンを行う。筆者のグループについては、やはりSWOTをやる意義について、質問というか批判が出た。他のグループは、どちらかというところ、ダンスや音楽といった文化的産物への導入を強調したもの、インドネシア人の移民を対象としたプランでは、何回かの食事の設定をしたのち、それぞれのMy Storyを語らせるという設定が紹介され、果たして、そんなに簡単にMy Storyを語るだろうかという疑問が提示された。こうしたプレゼンについての議論が続いた。(約60分)

#### ⑥ コース評価

最後はコースの振り返り、質問を受けたあと、本ワークショップそのものの評価を行った。各自が質問要旨に書き込む。また同時に、My Bagを絵に描き、そこに自分の名前を書き、参加者がそれぞれみんなに自分のポジティブな感想を書き込むという最後のタスク。これは各自が帰国してからそのMy Bagを開けるというものだった。筆者自身もほぼ全員から暖かいメッセージをもらった。(約30分)

以上が本ワークショップの全容である。各セッションで実に厳しい意見、批判も続出したが、それでも参加者全体の一体感は醸成され、4日目と5日目には、ワークショップ後の飲み会、さらには終了後の6日目にはディナーが企画された。そこでまたワークショップでの議論が再燃し、夜遅くまで議論は続いた。それはまた帰国後もメールで続いている。

本ワークショップは筆者自身の東西の価値観の差異についての理解を深め、またとくに異文化適応支援の方法論において、様々な知見をもたらしたが、それ以上に、このようなワークショップ開催の意義を再確認する機会となった。この記録をまとめたのも、できるだけ多くの人にこのような機会の存在を知らしめるとともに、このような機会創出のきっかけとなることを願うためである。

本ワークショップの独自性はどのような点にあったかについて、以前日本で開催されたワークショップとの比較も含め、簡単にまとめたい。

まず第一に、講師、参加者双方が対等に対峙し、様々な問題について、議論を尽くす点にあった。このようなことが可能となるためには、講師陣の知見、自信、リーダーシップが不可欠だが、参加者側の自覚、積極性、協調性なども必要で、その両者がバランスよく一日目から醸し出された点が特筆すべき点であった。

第二に、講師、参加者の国籍、職業的多様性をまったく障害とせずワークショップが最後までスムーズに実施された点である。最初にくぎを刺されたこともあり、英語力の差も障害とはならず、全員が快適に時を共有できた点である。知識量の差もさしたる障害とはならず、批判等は表出されても、退屈であるとか嫌悪感といったものはまったく認められなかった。日本でのワークショップでは、時間がたつにつれ、参加者間の職業的ギャップが目立ち、むしろ互いに離反していったことが記憶に残っている。

第三に、講師、参加者ともに、今回のワークショップでの知見、体験を各自の職業的キャリアにどう加えていくかという点について、考えを述べあった点である。ほとんど異業種間交流の趣があったにも関わらず、それぞれのプランニングが全員の関心を集め、互いに意見を述べ合うという雰囲気が最後まで保たれた。

地球上の様々な人々との交流を可能な限り、多くの人々が体験することで、互いの理解と信頼が深まり、地球がよりよい「居場所」となることを願ってやまない。なお、筆者がそもそも自分の異文化理解講義のシラバスを「居場所発見シラバス」と名づけたのは、本ワークショップを開催した *elan interculturel* が「*ibasho*」という日本語を用いて、その活動を紹介したホームページを数年前に見つけたことがきっかけであり、また本ワークショップに参加したのもその故であることを最後に付記しておきたい。

(参考文献)

- Cohen-Emerique, Margalit 1999 *Le choc culturel, methode de formation et outil de recherche*. Demorgon, J., Lipiansky, E.M.(eds) *Guide de l'interculturel en formation*. Paris, Retz. pp.301-315.
- Hall, E.T.1989 *Beyond culture*. Anchor Books.
- Hevin,B., Turner,J. 2006 *Pratique du coaching. Comment sonstruire et mener la relation*. Paris, Intereditions-Dunod.
- Kuhn, M.H., McPartland, T.S. 1954 *An empirical investigation of self-attitude*. *American Sociologist Review* 19.
- Sligman, Martin, E.P. 1991 *Learned optimism: how to change your mind and*

your life. New York, Knopf.

(留学生センター長・教授)